
心の軌跡

櫻井樹翠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

心の軌跡

【Nコード】

N0867B

【作者名】

櫻井樹翠

【あらすじ】

時代は現代。政府によって、子供は“イラナイ”子供たち（主に親に逆らった子ども）と普通の子供たちに分けられ、“イラナイ”子供は日本の孤島にある沙央島、通称『機械仕掛け』に強制送還される……。そんな時代に、澤崎秋人は自分は関係ないと思っていた。だが、奇妙なCMや黒い服を纏った女に付けられる様になった時、止められない変化は秋人を飲み込んでしまう。

第一章第一話「全ては遠き日々」

『心の軌跡』第一章

そこは暗闇に少しの灯りがある場所だった。

そこはテレビから見ても真っ黒な映像だった。
ただ。

人はクッキリと見えた。

一人の女と一人の少女。

少女は微動だに動かなかった。

女は少女に畏まって会釈をした。

途中、女の後ろが縦に光が走った。

女はそれを確認すると、

少女を手招き、

少女も応えた。

二人は光のもとへ歩いていった。

そんな、大した事の無い勧誘CMが流れていた。僕は朝食を食べながら無感傷にCMを忘れる。

「……？」

忘れようとしたが、何故かその光景は脳裏から離れなかった。僕は首を傾げつつ、テレビを消した。

「何でだろう？」

不確かな印象だけが、僕は困惑させた。
だけ。

「まあ、良いかな」

僕はいつもの如く、それほど意識はしなかった。

どうせ、さっきのCMは誰かは見た筈なのだから、自分が気にし

ても仕方がないと。

気になるなら、クラスの友達か大人に訊けばいい。学校は、自分だけで考えを決める環境では無いのだ。もちろん、逆もあるが。

「そうだ、明日期末テストの解答合わせだっけ。じゃあ、図書室で集まるよね」

納得して、僕は自分だけで答えは出さなかった。

もう、僕は独りでは無いのだから。

第一話「全ては遠き日々」

幾度となく、重たくのし掛かる雨が僕を通り過ぎて行った。何時間経ったのかは僕でも分からない。傘を差さずに、僕は下だけを見ていた。

――そう。僕は初めて壊してしまったのだ。

次第にむせ返ってくるのは、昨日のこと。友人と他愛の無い会話をしながら別れ、家の玄関まで帰った僕はありえないモノを見た。化け物とか幽霊の怪奇の類では無い。父さんと知らない女が、母さんによって殺されるようとしている。非日常な光景だった。

僕はその様子を深く思い出してみることにした……。

六時間目終了の鐘が鳴った。日直が号令し、おもむろに立ち上がって礼をする。

いつもの何気ない動作。でも、僕はそれ故に安堵をつく。クラスメイトや先生にとっては、代わり映えのしない光景だろうけど、僕にとっては天国だった。

- -それは何故か？

僕は中学までイジメの存在であり、今の高校では誰も知り合いないからだ。中学校でのイジメは、多々あった。名前も知らない同級生が僕のノートを散々落書きした拳句、縦や横にビリビリに破いていた。トイレに入っていた時も上からバケツの水をかけられ、悪口は当たり前、ナイフで恐喝もされていた。

彼らにとって僕は抵抗しなかったあのモルモットだった。いや、モルモットと称するにはおかしいか……。

僕はストレス発散の道具でしか無かったのだ。

だから、僕はそんな周りが嫌で。何も出来ない自分が嫌で。いつそのこと、どこか遠い場所に行ってしまうかと思いい、この高校を選んだんだ。駅が特急でも五駅はあって、最早誰も知らない未開の地へと。僕は自分の意志で足を踏み入れた。

クラスの奴は大体話を合わせれば他愛の無い会話をしてくれる。中学ではありえなかった光景だ。だが、僕は毎日の様に感激しているため、クラスからは変な奴だと思われるらしい。

そんな中、友達になってくれる人達がいた。余り特徴の無い出席番号十二番の女子。逆に熱血漢で特徴が有りすぎる男子の委員長。二人は僕を空気とは扱わず、友達として見てくれた。僕には勿体ないぐらいの友達で。それを彼らに伝えたと、逆に呆れられたけど。

『……当たり前だろ？ それに俺より自分を優先しろよ。胸を張れ！』

『貴方、今言ってること分かってる？ それを下衆の勘繰りと人は言うのよ』

それで、委員長笹草栄司と出席番号十二番の燈東江里は僕を迎入れてくれた。僕にはそれが単純でいて、無性に心に残った時間だった。僕はこの日を多分、一生忘れない。

回想から戻った僕は帰り支度をし、いつもの如く集まり場にいる図書室に直行した。図書室は教室から十分は掛かる。足早に廊下を歩き、雑踏を避けながら図書室の前まで進んだ。無造作にドア

を開け、恐らく中にいる江里を探す。

その中に、……いた。図書室の隅っこのテーブルを陣取り、黙々と小説を読んでいた。近づいてみると、題名は『輩の剣』。彼女のマイ文庫本中の一つだ。彼女は歴史小説を心酔していて、

『歴史を語れない人間は、ただの屑でしか無い。興味もない人間は存在も無意味。……ふふふ、くたばれ』

いつもの性格も変わるほどの歴史愛読者になる。拒否するなど、彼女を敵に回すことだ。僕はまだ生きていたいので、否定はしていない。ことわざにある、触らぬ神に祟りなしとはこの事だろう。

僕は苦笑し、江里に手で返事をした。彼女は視線をこちらに向けてる。が、小説のページを捲る暇は無いらしい。僕は仕方なく彼女の真正面の席に座り、チラリと観察した。

彼女は青いメタルフレームのオーバル、レンズはプラスチックの眼鏡を掛けている。前髪は降ろしていて、煩わしいのでは無いかと一度尋ねてみた事があるが、それでも無いと答えてくれた。顔立ちが意外と整っていて、一房にまとまった長髪が存在感を露わにしている。いわゆるクールビューティで、

「……何？」

彼女が顔を上げた。訝しく、僕を注視する。

「いや。可愛いなあって……」

「ありがとう」

「……愛してるよ」

「知ってる」

と、当然の如く足下にもされない。何となく男として悔しい。

江里は小説に栞を挟んで、鞆に入れた。どうやら、僕の相手をしてくれるみたいだ。おもむろに両手を交差し、顎を乗つける。何かの世間話をするポーズだ。巷で評判な歴史小説の事かと推測するが、彼女は僕に質問をしただけだった。

「秋人、大丈夫？」

「……はい？」

何を訊かれているのか、意味が分からなかった。第一、5W1Hが抜けている。

「つまりね、」

江里は誤解に気付いたのか、少し咳をして質問を改めた。珍しい。彼女でも間違えることはあるのか。

「両親とか変わったことはない？ 白状すると、その意味を間接的に訊こうと貴方に質問したわけ」

「ああ、そういうことか」

僕は成る程と、思った。彼女は彼女なりにプライバシーを考えたらしい。僕たちは友達なのだから、気にする必要など無いのに。

と、まあ。質問には答えないといけないな。僕はいや、と首を振り、

「特にないよ。それに、親は僕には不干涉。相手にもされないし」

全くね、と苦笑して答えた。そう。両親は僕のイジメに触れあってくれなかった。日常の会話なども『ああ』とか『そう』としかなかった。記憶にあったとしても、小学生になる前だ。あの頃は今のようない無表情ではなく、しっかりと笑んでくれていた。誇れるような両親だった。それが、何故。冷徹な関係になってしまったのだろうか……。

「……」

「秋人、帰ってきなさい」

「ん？ ごめんごめん。それで、何で親の事を？」

「それはね、……心配だからよ」

江里は己を後悔しているような、表情を垣間見せて、言葉を続けた。

「貴方も……、“イラナイ” 子供になるんじゃないかって。推測して悪いと思うけど、あの子そうだったから」

あの子と聞いて、僕は視線を彷徨わせた。

あの子とは江里の友達で、僕もその関係で親切にもらった。名前は成瀬千里。クラスは隣だったけど、放課後は図書室で話す仲

間でもあった。しかし、一ヶ月後彼女は“イラナイ”子供と認定され、沙央島。俗に言う『機械仕掛けの島』へと送致された。建前は『社会に出しては恥ずかしい存在』として。本当の理由は彼女の両親が彼女に飽きたため。彼女は捨てられた。

理不尽な理由だと思う。

けれど、社会は僕の理想とは逆を行っていた。大規模な粛正活動をしたのだ。親の言うとおりにしない子供、傷つけた・殺人に奔った子供、『イラナイ』と判断された子供。または精神が崩壊している、肉体的に不備がある子供。犯罪を犯した子供。

人権など無視されて、『機械仕掛けの島』へと送致させられる。

風の噂では国籍を剥奪され、日本から抹消されるらしい。

「うーん、それは無いんじゃないかな。僕の親はその位置に類されるけど、変化が嫌いなんだ。だから、いきなり僕を送る事は無いよ。断言は出来ないけどね」

僕は嘆息してこれに答えた。

僕の親は、いわゆる事勿れ主義だ。僕を含めてだけど、遠慮して自ら変化を催すのは好まない。日本人の大部分にあたる習慣だ。逆もあると思うが、そういう人は周囲に溶け込めないだろう。

その点で周囲に溶け込めている僕の親は、日本人に良くある現象として裏付けられる。でなければ、離婚を直ぐしていると思う。僕の意見など関係なしに。

江里が黙っている事に気付き、僕は明るい雰囲気に戻そうと話題を切り替えた。

「それより、この前の期末テストどうだった？僕は相変わらず、平均ちょい上」

「期末テスト？別に大して意味のない結果ね。見てみる？」

と、言いつつ江里は鞆からファイルを取り出し、テーブルにズラツとテストを並べた。見ると、全てがオール百。彼女が意味のない結果というのは頷ける。

でも、中間テストから連続して取っているのは凄かった。僕は思

わず、それだけで感嘆をあげる。

「前に引き続き、凄いな。何か対策があるの？　こんなに的を射れるなんて、事前にテスト解答を確認して無いと無理かと思うけど……」

「知りたい？」

鎌をかけたつもりが、逆に地雷を踏んでしまった。彼女は得意そうに、むしろ悪魔の笑みを浮かべる。けれど、

「いえ、滅相ありません」

僕は危機を察して回避した。何というか、微笑んだ彼女は怖い。

「そう？　まあ、ネタをばらしちゃうとテスト解答は関係ないんだけど。要は分析よ」

「分析？　問題の分析なんてそれこそ、暗記してないと無理だって」

彼女はそれこそ違うと、首を横に振った。

「誰がテスト問題って言ったの。余り答えを急がないで」

僕は彼女の応えに、自分を恥じた。物事を性急に行うと良くない方へと行きやすい。

少しの間、息を整える。

「はあ……。落ち着いたよ」

「よろしい。テスト問題はあながち間違っていないんだけど。学校のテストで唯一予備校とは違う点は何だと思う？」

「違う点……。違う点かあ。うーん。学校と予備校で、テスト」

僕は検討が立たず、思索に囚われる。しかも、余り解答はでない一つ。唯一一つは、考えられることが見つかった。しかし、あたふやで合っているかは分からない。

……だがここはあえて、言った方が良さだろうか？

僕は何と無く、彼女に質問した。

「ごめん、多分なんだけど。テストを作っている人が違うんじゃないかな」

対して、彼女は若干驚く顔を見せた。正解、と微笑む。そして、

「じゃあ、つながる結果は何？　そこまで出来たら勝ちは譲ってあげる」

彼女はふざける子供みたいに、口を良く動かした。

僕は考えがあっていたことに喜び、次なる答えを頭の中で並べた。しかし、

「それはやつぱり、作る奴のパターンが違うからだろ。予備校はその方面の実験で得られた内容を出すけど、学校はテストごとに同じ教師が担当する。つまり、テストを担当する教師を上手く分析すれば、癖を掴み取ることができてテストの内容も予想できる。そう言う意味では、予備校は実践型で学校は学習型だよな。だから、俺や江里子が毎度百点を取れるわけだ」

横やりに栄司が説明した。僕はうなだれて栄司を睨む。

「馬鹿委員長……。何で僕より先に説明するのさ」

「フフ、そうだな。それは、俺が目立ちたがり屋だからなっ！」

一拍の間があり、幻聴で波が打ち上げる効果音が聞こえた。この男には背景に断崖絶壁がよく似合うだろう。しかも、何故か親指だけを突出させている。

何が楽しいんだか……。

栄司の行動が毎度不思議に思えて仕方がない。ここは図書室なのに、いつも来るときは派手な登場をしてくる。勉強しに来てる人や読書をしている人にとって、この上のないはた迷惑な存在だと思うけれど、彼自身はいつこうに気にしたことはない。

「いや、そこ。普通胸を張って言うところじゃないって。江里も何か言ってるよ」

「そうね。今日は早かったわね、栄司。加点」

「違うよ、それは……」

僕は想定外の応えにテーブルに突っ伏した。しかも、加点一つで何だ。減点一は聞いたことがあるけど。まさか、

「栄司に気があるんじゃない」

しかし、江里は表情を変えずに否定した。

「無いわ。というより、どうしてもそこに結びつけるのかな。私は彼の善き行いとしてプラスしただけで、色恋沙汰とは何ら関係は無いし」

「はいはい、そういう事にしようぜ」

栄司はどっこいしょ、と中央の席に座った。もうケチを付けるのは止めにしたいが、彼の座り方はどこかジジ臭い。

「ところで、何の話をしてるか分からないが。江里子に贈り物がある。どうぞ」

栄司は無造作に、鞆の中からラッピングされた箱を江里に手渡した。彼女は訝しく、箱の中身を訊く。

「これは何が入っているの？ それと、誤解があるようだけど。私の名前は江里だから。訂正よろしくね」

「分かった。中身については安心しろ。俺のプロマイドなんか入ってないから」

彼女はそれでも眉を潜ませるが、ラッピングを丁寧に解いて箱を開ける。すると、

「……『乾燥イトミミズ飼育用にどうぞっ！』って何？」

僕は無言でいた彼女の代弁をしてあげた。箱の中身に呆気を取られたが、栄司の行動にはもっと驚いた。普通、女の子にプレゼントする物じゃないような。

「全くね、栄司も何を考えているんだか。ねえ、江里……さん？」

「……おいしそう」

彼女はゴクリと喉を鳴らした。

ちよつと待て。

「大丈夫、江里！ えーりー。落ち着いて、一時の気の迷いだよ。多分」

僕は陶醉してる彼女を揺らす。

だって、おかしいじゃないか。

ただでさえ、プレゼントされた物が普通じゃないのに、喉を鳴らすなんてさ。こっちまで、もしかして乾燥イトミミズが美味しいん

だ、とか思えてくる。本当にどうしたんだ、江里……。

また栄司は僕のことなどお構いなく、話し始めた。

「お前の奴、もうすぐなんだろ。だから、イトミミズー？買ってやったぞ」

だから、一体何なんだよ。

僕はクエスチョンマークを頭に並べた。

「ええ、ありがとう。お陰で羽化できると思う。で、……何をやってるの？ 秋人」

「いや一人ぐれてるだけだよ。でも羽化って……どういうこと」

「ああ、それね」

彼女は得心がいった様子で、僕に向き直った。携帯電話を取り出し、写っている画像を見せる。画像を見せられた僕は啞然としてそれを見つめた。

「……ヤゴ？」

そのヤゴは円筒形で、頭と胴の間がややくびれていた。頭は丸く、目が見え取れる。流線的な全身は滑らかに存在感を露わしていた。彼女は微笑みながら、画面に指さす。

「そう。これね、銀イチって言うの。もう少しで成虫化するのよ。それで、この子は銀ジ」

携帯の画面が移り変わった。先ほどのヤゴよりも、多少大きい気がする。それ意外は変わらない。

「可愛いでしょう。そして、次が銀サブ。この子は小さくて……」

「うん。親ばかは十二分に分かったから。僕としては何で乾燥イトミミズをおいしそうって言ったのか、気になるんだけど」

嬉々として語る彼女に辟易して、会話を切り替えた。半ば無視されていた栄司は欠伸をかいている。だが、ここは更に無視しよう。彼を話に誘うと、無駄に会話が肥大する恐れがある。

彼女はでれつとした顔を一变させて、いつもの無表情に戻り訳を話した。

「それはね、飼育費が浮くからよ。ヤゴって羽化するとトンボにな

るじゃない。育て親としては栄養をしつかり持ってくれないとね」
「……なるほどね」

良かった。なんだか、僕の誤解が空回りしたようだった。
僕はそれで安心して、ふと腕にかけてある腕時計を見た。短針が5、長針が12を指している。十分な時間を過ごしてしまったようだ。僕は江里や栄司にそろそろ帰ると伝え、テーブルの席から立つ。だが、図書室のドアの手前であることを思い出した。それを訊くべく、さっきのテーブルまでとって返した。

「何だ？ 帰るんじゃないかったのか。まさか、俺に愛の告白とかじゃないよな」

僕は栄司を当然の如く無視し、江里に話しかけた。

「江里、ちよつと訊きたいことがあるんだけど……」

「なにに、私のスリーサイズで無ければ喜んで」

「もちろん違いますって。あのさ、……勧誘CMとか見たことある？」

江里はその質問に、少し間を置いて答える。

「生命保険とか介護保険とかなら見たことあるけど。それ以外は無いわね。特徴は？」

「背景が暗闇で、役の人は二人。暗闇の中に一線の光が瞬いて、女の人が少女をその場所まで連れて行くっていうやつ。チャンネルはまばら」

「……」

彼女は何かを考えるように、手を口に当てた。

「そうね。それだけでは何とも言えないわ。私は見たこと無いし、そもそも範囲が広すぎる。一定の時間帯でチャンネルも限定されるなら、話は早いけど」

「まあ、そうだよな。ごめんね、無理な注文言つて」

「いいわよ。……でも、何かが引つかかるのよね。そのCM。あれは、そう。千里が『機械仕掛け』に行く前だったかな。あの子も澤崎君と同じ質問をしてたっけ」

徐々に拡大する推測に拍車が掛かっていく。会話に参加してこなかった栄司が、その話をつなげた。

「ああ、これは江里子にも初めて話すんだがな。……俺の兄貴も同じく俺に質問してたな。『地味な勧誘CM見たか？』って。その後、数週間で『機械仕掛け』に連れて行かれた」

「え？ 栄司のお兄さんって留学したんじゃないの」

江里は知らなかったらしく、驚いていた。栄司は首を横に振り、「嘘だ。世間上ではそうなってるけど、とある事件が原因で俺が中学三年生の時に『機械仕掛け』へ強制連行させられた。たまに手紙とかでやりとりしてるけどな」

ふう、と栄司はため息をして会話を切った。栄司にとって余り思い出したくないような内容だったらしい。僕は栄司を珍しく気遣って、肩をポンポンと叩く。

「辛かった？ 泣いてもいいんだよ」

「……あのな。誰が野郎の胸で泣けるか。ここはあえて、江里子の胸を借りようって。……って、江里子痛いから関節極められたら砕けるから捻られたら本当に死ぬから、ギブギブっ!!」

「誰が誰の胸を借りようですって？ 私の栄司に対する評価が下がったわ。減点二十。ちなみに、後十下がったら死、ね。当然の結果よね、なんて言ったって私に殺されるんですもの……」

「殺されるの確定かよ!？」

「もちろん」

頷く江里に、栄司は顔を真っ青にさせた。

僕は彼女の悪魔の笑みを再び見て恐怖したが、栄司に関してはもうお手上げ状態だった。どう見ても、栄司の釈明は難しい。いや、そもそも栄司を弁護して一体何の価値があるのだろうか。熱血漢で誰からも好かれる人格は認めよう。

だが、一旦羽目を外してしまうとどうにも収集がつかない。更に周りの人間をそれに誘発させてしまう。そこが栄司の欠点だ。

「まあ、栄司。骨は海に撒いてやるから、環境回復に貢献してよ。」

……で、大丈夫かな？」

僕はある状態を察して、横目で周りを注視する。他のテーブルでは閑古鳥が多いが、明らかに勉強または読書をしている生徒がいる。その生徒達は僕達を白い目で見ていた。

ああ、やっぱり。

辿り着く結果は最悪なことだった。カウンターから司書の先生がこちらに向かってくる動作も窺えるし。まずい、これは。

「……ごめん、江里。そろそろ危ないと思うよ」

「何が？ ……ああ、アレね。確かに後処理が大変そうね」

彼女はヤレヤレと頷き、放心している栄司を尻目に席を立った。ファイルを回収し、僕と一緒に図書室を後にする。しかし、

「大丈夫かな？」

と、僕は図書室を出たあと少し後悔した。毎度ゴミのように扱っている栄司だけど、今回は少しやりすぎたと思う。友達を例えただと生け贄にしまうなんて……。

江里はしかし首を横に振るだけだった。

「いいの。アレはアレで考えて私たちを逃がしてくれたのよ。それに、アレはいつも後処理担当でしょ？ 最高の役回りだと思うわ」
「……。そうだね。栄司は僕たちに気を遣ってくれたんだ。有り難う、栄司」

『って、江里子と秋人いねえじゃねえか！ どこ行っただあいつら。あ……、司書の先生。俺は騒いでいませんよ。いつもの如くマイペースできりきりバツタ・餅つきウサギみたいに勉強してましたって。ってててて、抓んないで下さいよ。体罰で訴えますよ。ん？ お前には関係ない？ で、今度は広辞苑持ち出すと。でも、その角度で振りお下ろしたら……マジで死ぬから！ ……ッッ！』

図書室の中でなにやら悲鳴が聞こえてくるが、この際気にしないようにする。

さらば、栄司。君の死は無駄にしない。

僕はさり気なく、敬礼した。

「それで。私と話がしたいんじゃないかった？」

昇降口で靴を出している時、江里に声をかけられた。

「ああ！ そうだった。ゴメンね、僕忘れっぽくてさ」

「下手な芝居は良いの。訊きたいことがあつたら、何でも話してね」

僕はそうだね、と謝って、

「江里には、ばれちゃうか……。話はね、最近誰かに見られてる気がするんだ。ストーカーかなって思ったけど、僕は顔は良くないし特に悪いことはしてない、……と思う。これといって当てが無いんだよ」

深々と息を吐いた。

そう。

僕は何者かに着けられている。昔のイジメ同級生でも新聞配達員でもマフィアでも無いなにかに。気配察知に長けている訳でも無いので、人すらも怪しいが。ちらっと、一回垣間見たことがある。

あれは、漆黒の衣を纏った女性だった。

「確か、女の人だったけど。見たこともない人でね、黒い服を着てたと思うよ」

「黒の服で、女性。……悪いけど、それと先ほどのCMの発生時期は一緒だった？」

「……たぶん、そうだと」

僕はおぼろげながらも、頷いて答えた。

でも、何で関係あるんだろう？

CMと黒い服の女性。発生時期が同じだとしても、それ以上の接点はない。他があつたとして、それは僕が知らない事情だ。考えられることはもう無い。だが、

「やはりね」

と彼女はつぶさに微笑んで、鞆の中からファイルケースを取り出

した。『重要』という欄から、プリントアウトされた紙を二、三枚僕に手渡す。

「これを見て……。そう、ここ」

指さされた場所を、僕は目で追った。辿り着くと、都市伝説と書かれていた。週刊でマスコミが騒ぐ記事とは違い、至つてまじめに書かれた文章だった。

「都市伝説という表現はおかしいけど、これは仕方がないの」

「うん、知ってる。情報規制がされているからだよね。だから、真実は明かせずに。擬態して、本当を伝えようとしてる」

正直この手は、新聞などで良くやられている。数年前から全ての情報が規制され、検閲を通らなければ記事として出せないようになった。だから、書き手達は一種の喩えを用いて真実を公開している。ただしこれは余り掘り下げて読まないと、執筆者達が一番伝えたかったことが伝わらない。一文字でもミスしてしまうと、暗号文に成り下がるからだ。ゆえに、検閲に引つかからない。ただの三流記事に見えてしまう。

「そうよ。話を戻すわね。それで、問題の記事。紙の空白に意味を書き写しといたから、読んでみて」

僕の焦点は記事の空白にある、彼女に書かれたであろう端正な文字を読んでみる。語り手は取材した記者のようだった。彼はこう述べている。

『私は十月某日にある少年の取材をした。その少年は至つて平凡な、非行とは何ら関係のない素行だ。だが、逆に両親は良くない噂が聞こえ、彼を陰で虐待をしているようだった。彼は実の両親に何度も刃物を突き立てられ、児童相談所に何度も入れられたそうだ。それでも、彼は怯えもせず嫌な顔一つしなかった。何故なのか、と訊いてみると“両親の行為は正しい。自分がいけないのだから”少年自身に罪があつたかのような台詞を語った。私はその答えに度肝を抜かれた。彼は両親による虐待を当たり前のように正当化していた。いや正当化されていたのか。それは、私は分らないしここでは記

さない』

一枚目が終わり、二枚目を手元に寄せる。

『十月某日。私は再び少年の取材を続けた。彼に最近変わったことは無いかと尋ねた。彼は問いに、クラスで何人か沙央島に行ったと答えた。沙央島。私も聞いたことがある。政府が定めた、犯罪を犯した子供達の更生施設。そこは政府の、というよりもさる企業が運営している独立している建物であることを。また、犯罪とは名状しがたい理由で入所させられる子供達もいるらしい。子供達はどこで連れ去られたのか、どの経由で沙央島に送られたのかは未だ謎だった。情報規制が敷かれているせいか、私の方にも情報が来ない。表現の自由、言論の自由、報道の自由が無視されている今ではそれも仕方がないだろう』

最後に三枚目を手に取った。

『十月某日。私はまた少年に取材をした。彼は再三による私の取材に嫌がりもせず、答えてくれた。その中で、一番気になったことを記す。彼は最近あることで悩んでいるらしい。それは奇妙なCMと誰かに着けられていることだった。CMはテレビに良く流れている我々にとっては愚問なことだろう。彼の証言はこうだ。彼はいつものようにテレビを見ていた。すると、今まで見たことがないCMが流れたらしい。“内容的には勧誘のCMと思った。でも余り類の見えない内容だった。全ての背景が暗闇で映し出され、それなのに人間がクツキリと見えただよ。二人の人間。片方は女性で、片方は少女。彼女たちはジッと佇んでいた。そして、女性が少女を手招いて少女は躊躇ったけど、最後には女性のもとへ歩いて行った。その瞬間、背後に一線の亀裂が入って彼女たちはそこに向かったんだ”それは私には意味不明だった。内容に関してだ。勧誘にしては地味で

勧誘そのものを宣伝してはいない。果たして宣伝する必要があったのか、そもそも怪しい。彼女たちは、制作者達は我々消費者である国民に何を伝えたかったのか。また、それよりも怪しいのがCMは彼以外に見えなかったそう。両親もクラスの友人でさえも、CMは見えていなかった。チャネルはまばらで、時間帯が違うのは分かってる。しかし、その場にいた両親もCMが見えていなかった。これは異常だ。次は彼が誰かに着けられている件。彼はいつも一人で下校しているそうだが、最近になって名前も知らない誰かに着けられている。彼は一瞬、振り返ってその人物を見た。黒い服を着た女性だった。ここで気になることが一つ。CMと黒い服を着た女性が現れる時期は同じ。それは、事件に関して……」

読むのに疲れてきたので手を休めた。しかし、この記者が言いたいであろうことは掴めたので、三枚の紙を彼女に返す。

「参考になった？」

「おかげさまで。それで、この少年は一体どうなったの？」

僕はその答えを予想できたが、それでも訊いてみたかった。江里は言う。

「秋人のご推測の通り。沙央島に連れて行かれたわ」

彼女は笑いもせず、淡々と答えた。

「……ごめん」

「私に謝ってどうするの。さあ、そろそろ帰りましょう。アレが来ない内に」

「そうだね。サヨナラ」

「うん。またね」

彼女と一緒に会釈し、僕は先に学生靴を履いて昇降口を出た。時間の関係か、帰る生徒は余りいない。従って僕は喧噪と関わらずにバス停まで歩ける。それは僕にとって幸運なことだった。過去にイジメがあつたせいか、意味もなく震えてしまう。

「……。それでも、良くなった方だよ」

眩き、僕は歩き始めた。普段から通い慣れた通学路がなにとなく重く感じた。イジメられたあの頃のように、雨が降りそうな天気の時為なのかもしれない。

僕は白い息を吐いた。

バスと電車を経由して、僕は地元の『伊瀬』駅へと帰ってきた。レトロチックな電車から降り、素朴な一番線の路面を踏む。虚ろに行き交う人々と一緒に階段を降りて改札口を出た。ここで僕は息を整える。

たった今から、駅向こうは戦場だ。

僕にとって、少なくとも帰るまでは。

若干肩を力ませて、一步を踏み出した。周囲を警戒してソロリソロリと歩いていく。

他人から見れば異常な光景だと思いかもしれないが、僕にとってはこれは儀式だった。

――イジメの頃の僕に返らないためにも。

十分歩いた先に、昔中学で同級生だった不良がタバコを吸っていた。

不良は毎日の如く、僕の帰り道にいる。財布の力モと見ているからだ。

しかし、僕は不良なんかに屈しない。屈するものか。

僕は明らかに無視を決め込んだ。不良の前を素通りしていく。そして、案の定。

不良に声を掛けられた。

「おう、澤崎クンじゃねえか。俺きょう金穴でさ、金貸してくれねえか？」

だが、僕はそれを無視して歩く。財布には金はあるが、こんな奴に渡すほど馬鹿じゃない。僕は足を速めた。

「おい、聞いてんのか？ こっち向けやウジ虫」

イジメの時に通称された名前が出たが、それでも僕は不良に顔を向けなかった。そしてもし、暴力という手段を相手が使ったら逃げれば良いだけなのだ。媚びを売るよりマシだ。ただの『逃げ』でなく、価値のある『逃げ』と言える。

「いい加減殺すぞっ！ 手前！」

そして、不良が腕を振り上げた瞬間、僕は一目散に逃げ出した。相手を振り返ることもなく、ただひたすら前へと。

僕は飽きることなく、いつもこれをやっている。僕は毎日、価値のある『日々』を送っていた。

数分、走って辿り着いたのは家の近所にある公園だった。僕はそこで息を整え、少しの間休息を取る。

「はぁ……、疲れた……」

僕は荒い息を吐いた。運動が苦手なせい、体力が上がってしまふ。いや、喘息で肺が弱いからかもしれない。幼い時は良く入退院を繰り返したものだ。

始めの頃は点滴のチューブにつながれ、吸入器をして痰を吐いていた。病院のご飯は不味かったし、テレビや風呂も共同で（さすがに男風呂と女風呂で分けられていたが）、楽しみは売店で売っている週刊誌が親が持ってきてくれる漫画とゲームだけだった。消灯は九時で、今の生活と比べれば格段と違う。だから、僕は退院していつもの生活に戻ろうと治療に躍起になっていた。吸入器で結果を少し誤魔化して、普段の体力に戻るようと規律ある生活を努力していた。お陰で中学生からは喘息で病院に入院したことは一度もない。多少は季節（六月と十一月。湿度が高いときは特に起きやすい）と風邪が原因で発作が起きることもあるが、概ね改善しているみたいだった。

「水飲もう」

僕は喘息による思い出をうち切って、公園にある自動販売機へと

向かう。自動販売機のもとへと歩んで、硬貨を数枚入れた。ジャゴン、と音がなり出口に出てくる。僕はその『ギブミー、お茶』を持ち出し、グビグビと飲んだ。

- -と、どこかしら視線を感じた。

僕は溜飲を止め、自分の周りを注視する。

「誰か、に見られてるよね。いや僕の被害妄想だったら、それはそれで構わないけど。なんか、おかしいんだよね……」

もしかして、例の黒い服の女とか……。

「まさか、ね」

僕は再び缶に口を付け、飲みながらそのことを忘れた。
公園の森の隅に感じる気配を忘れた。

家に帰り着いた時間は、結構遅かった。携帯の時刻が七時を表示していた。僕はいつもように鍵を出し、差し込み口に差し傾けた。
だが、

「……？」

何故か手に感覚がない。誰かいるんだろうか。両親はどちらも共働きで、平日はいいのに。もしかして、泥棒？ でもその可能性は低い。クレジットカード類は持ち出していそうだし、大事なものはあり得ない場所にしまい込んでいそうだ。

家で盗られそうなものと言えば、父さんが昔取った何かの優勝トロフィーだけだ。父さんはそれを、僕よりも大事にしている。

……そんなことはどうでも良いか。

僕は玄関のドアを開き、無言のまま入った。学生靴からスリッパに履き替え、二階にある自分の部屋へと先に向かった。

リビングに明かりがあつたが、僕にはどうでも良いことだった。小学生から口を聞かなくなった、あの頃からは特に。僕は十数段ある階段を上がり、一番奥にある自分の部屋へと入った。

「……変化をしないのが、一番なんだよ」

僕は鞆をかなぐり捨て、制服のままベッドへとダイブした。学生服が皺になるのは気にしないで、柔らかな毛布へと身体を埋もれさせる。

昔はそれでも、普通の親子みたいに関係を改善しようとした。だが、それは無駄なことだった。互いの意識が無ければ、成功なんかしない。僕だけが奮起しても、最終的には両親と話もできなかった。努力しても、裏切られるだけだ。

「だから、変化をしないのが一番。一番なんだ」

なにより、親が変化を望まない。関係を修復しようとする変化を嫌がる。

僕はそれだから、親への変化を望むのを止めた。

「父さんや母さんにはこれ以上、嫌われたくないから」

思えば、僕も変わるのが怖かったのかも知れない。親と同じで。

これ以上なく、変化というものを嫌がっていた。憎んでいた。でも、それと同時に羨ましがっていた。

「でも、結局は幻想なんだよね」

現実はいつも僕を裏切る。それは変わらないことなんだ。

「まあ良いや。テストを見せるか……」

僕は独り言を止めて、ベッドから身を起こし鞆からテストの答案を出す。結果は図書室でも言ったとおり、平均点だ。

――これも原因なのかな……。

テストの結果を上げれば、少しは親の評価が変わると思う。ほんの少し。表面上は、だけど。それがもとで母さんは近所のおばさんとの交流も出来そうだし。父さんも「へえ」から「ほう」に僕への視点が変えてくれるかもしれない。

「だけど、言うは易く行うは難し。そう簡単にはいかないものだよね……」

僕がどれだけ頑張っても、高得点平均は取れない。いつもこの程度で良いか、と満足してしまう。

それがいけないんだよね。

俗に言う事なかれ主義。いや俗にもいわないか。

「現状に満足してるからねえ……」

僕は部屋を開けつつ階段を降りながら呟いた。はあ、と嘆息する。

「でも、平均点でも評価してくれるかもしれない。現状維持ってことで。ははは」

僕は微笑んで、そしてうなだれた。

うわ。駄目人間宣言じゃないか、僕。

認めてるよ。……笑えないな。

僕は一人漫才をし、リビングのドアに手を付けた。暗い所からリビングを見ているせいか、若干眩しかった。僕は構わずゆっくりとドアたぶを握り前に押していく。だが、開いた瞬間、
「……！？」

いつもとは違う雰囲気飲まれて動けなかった。いや、動けはしたのだ。ただ、手のひらからテストの答案をすり落としただけで。リビングには、包丁を持った母さんと知らない女の手を握っている父さんが立っていた。それも、必死と憎悪の表情で。母さんたちは、相手を呪いながら対峙していた。

「落ち着けっ！ 母さん。包丁を持ち出すなんておかしすぎる。こは穩便に……」

「穩便に？ それはまたどういうことかしら。貴方は判らないかもしれないけど、私は正気よ」

制止を求める父さんを尻目に、母さんは親の敵を見る目で二人を睥睨していた。正気といていたが、それは狂気と言い換えても過言ではなかった。母さんは『いつも』を壊した二人を憎んでいるのだ。原因はどちらにあっても、それを変えた犯人を呪っているのだ。

僕はそれを眺めながら、別に喜びに浸っていた。普段澄まし顔だ

った二人が人間の顔になっている。僕が出来なかったことをしている女性に感謝したかった。たとえ、両親の関係が崩壊する事態をつくっても、だ。

ドアタブを握っていた手を離し、僕は扉の影に隠れた。このあらましをじっくりと観察するためだ。普通はここで飛び出して、制止を呼びかける側に入らと思うが、僕は三人のこれからを見たかった。

だって、両親が表情を露わにしているのは久しぶりだから……。決められた選択肢に従う必要は無いし、また母さんの狂気が伝染したと思うのだ。

「貴方、退いてくれる？ 用があるのはその女だけよ。貴方の命までは取らないわ。さあ、早く……」

悪魔の囁きで、母さんはニイと蛇みたいに微笑んだ。目は父さんに守られている女だけを見ていた。父さんは及び腰で、説得を続ける。

「なあ……。命までは冗談だろう？ 本当に悪かった。この通りだから、許してくれないか……。ほら、彼女も冗談で震え上がったる」

「……。ええ、そうね。命までは取らないでいてあげる」

母さんは彼女を見て、包丁を引いた。表情は変わらないまま、今度は父さんを直視する。

僕は嘘だ、と思った。母さんはその一言だけでは止められない。もとより包丁を持ち出しているのだ。今更後戻りは出来ないし、出来たとしても口封じを二人が飲む以外はあり得ない。母さんには全ての原因の彼女を殺すしかないのだ。事実、母さんに否はないのだから。

「ただし、傷をつけるのは良いわよね。それが元で死んでも知らないけど」

そう言って、包丁を逆手に持ち替えて父さんの太股と腹を刺した。咄嗟のことに悲鳴をあげられなかった父さんは、しだいに吹き出す

血をゆつくりと見るしか出来なかった。

「これは罰。私に逆らった、ね。次は女を刺すわ。せいぜい、私たちを苦しめた傷を負わせないとね。内臓を貴方に食べさせようかしら。それとも、眼球を標本にして飾ろうかしら。どちらが良い？ 貴女、自分で決めてみて」

包丁を引き抜き、母さんは女に告げた。包丁からは若干の血が滴り落ちてくる。その惨状をみていた女は、両手で口元を覆いながら逃げ出した。やっとのことで異常な事態が分かったらしい。だが、それを母さんが見逃すはずはなく、彼女の前を遮り手首に切りつけた。

「――ヒイツ！」

彼女は少しだけ悲鳴をあげた。

しかし骨が邪魔をしたらしく、がりつと切りつけたただけだ。母さんは包丁を引き、ポケットからハンカチを出して拭いた。

「ごめんね、脂が乗ってたらしくて。上手く切れなかったわ。夫は最近肥満体質だったから気をつけるべきだったかしら？」

血で染まったハンカチを無造作に捨てる。

その場面で、僕はあることに気付いた。

――父さんが死んだら、僕は戻れないんじゃないか？

いつもの日々に。今でさえ戻れないかもしれないが、彼女のことを忘れれば。この出来事を忘れれば。日常に戻れることが出来る。

だが、父さんが死んでしまったらバランスが保てなくなって変化してしまう。この怠惰で普通の日々に戻れなくなってしまう。

それだけは嫌だった。

僕は今更ながらも後悔し、身を起こしてドアタブを握り開いた。母さんの意識をこちらに向かわせようと、制止を呼びかける。

「母さん！ 止め――」

その一言で僕を除く全員の意識がこちらに向いた。

僕は確認すると、父さんに目配せした。無言で頷いた父さんは、とっさに蹲っていた女の手を取る。僕に構わずリビングを出て、玄

関の外に駆けていった。

そうだ。それでいい。

すぐに車庫にあった車が家の前を通りすぎるエンジン音が聞こえてきた。

父さんの逃亡は成功したのだ。

だが、逆にいつもの日常は崩壊したのだ。

それを認めるだけの判断材料が、今の僕にはなかった。

「……何で。何で、秋人は邪魔をしたの？」

僕を意識し、父さん達がいなくなった影響で、狂気から少し落ち着いたのである。母さんは呟いた。僕はそれに苦笑を持って答え、

「父さんとの日々を崩したくなかったから。おまけに、もう一人を逃がしちゃったのは結果だけだね。それは、ごめん」

頭を下げた。そして、呆然とする母さんから包丁を取り上げて、床に投げ捨てた。

それで事の一件は終わったかのように感じた。

だが、母さんは独り言をブツブツと呟いて、呪詛のように自分が人間を刺したのを正当化し始めた。いきなりの感情の歯止めに対応しきれないようだった。それを誰かの所為にして責めようと、母さんは崩壊し始めた。

「……フフフ、私は悪くない。悪くないの。悪いのは誰かしら？」

「全ての原因は夫がつくった女。女の誘惑に負けた夫？」

「何も変化がない私？ 違う。私は夫に尽くしていたわ」

「だったら、平凡な秋人？ そうよ。息子の秋人のせい……。全ては干渉しなかった秋人のせいよ……。フフ」

徐々にねじ曲がってくる執念に、僕は何も言えなかった。

僕の所為。それは何割方当たっているからだ。またそれ以上の割合は母さん達にもあった。また決して僕だけじゃないのだ。

だが、早く僕が認めてしまえば崩壊は収まるかもしれない。僕はこれ以上変化を望みたくは無かった。

「うん、僕のせいだよ。父さんが女をつくったのも、母さんが見捨てられたのも僕の所為なんだ。じゃあ、どうしたら許してくれるの？ 何でも言つてよ。出来る限りは飲むから」

「……死んで」

「え？」

「死んでよ！ この世界から死んで。いなくなつて。存在しないで私の前から消えて。秋人のせいで、こんなことになったのよ！ 貴方なんて生まれれば良かった……。ねえ、お願いだから死んで。私は貴方を育てたこと後悔してる。幼い時にでも殺しておけば良かったわ……。」

僕はその言葉に唇を噛んで堪えた。

昔イジメられた時は『死ね』と言われても大丈夫だったけど、肉親に死ねなんて言われると結構辛い。それが冗談ではなく本気で言われているのが痛い。

僕は抑揚無く小さく、「分かった」と答えて床に置かれてた包丁を手に持った。

「……。これで、僕は死ぬから」

「ええ死んで。……いえ、やっぱり死ななくても良いのよ。さっきのは嘘よ。秋人は死ななくても良いの。だから、それを離し」

僕は手で母さんを制止させる。母さんが例えそれが冗談だったとしても止める必要は僕には無かった。

「駄目だよ。母さんが望んだんだから、良く見て」

包丁をそのまま左手にいきよい良く突っ込ませた。ブシュ、と音が出ると思ったが余り聞こえない。血の柱が母さんの顔と床を汚した。僕は痛さを感じることが出来なくて、やってしまった後悔よりも不思議という感情しかなかった。

血に染まった左手を、母さんに翳して僕は言った。

「ねえ、これで良いよね。ねえ、これで僕を許してくれるよね」

「何、やって……。フフ、アハハハハハッ！」

母さんは僕の手を握って、突如嗤いだした。見ると目の焦点が定まっていなかった。顔を下げ、果てしなく嗤いを止めない。そして最後に、気絶した。僕を許しもせずに。

「何で？！ 何でなんだよ！ 僕は最善の方法をしたのに。母さんの言い分を聞いたのに」

僕は何も分からず、飛び出している血を口で塞いだ。味は余り感じなかった。

僕はその後、止血をして母さんがかつての寝室に持っていった。かつて、と言うのはもう父さんはいないからだ。ゆっくりと母さんをベッドに降ろし、布団をかぶせた。

「……うん。大丈夫だよ。母さんは大丈夫だ」

自分に言い聞かせ、僕はフラフラと廊下に出て倒れた。とてもじゃないが、二階にある自分の部屋まで行けなかったからだ。仕方なく、また寝室に戻り父さんの布団を拝借して廊下で寝た。僕はそれ以上、動けなかった。

「ん？ ここは……。痛っ。そうだ、僕は母さんに布団をかぶせて廊下で寝たんだった」

僕は周囲を見渡して、一人納得した。おもむろに止血をした左手を掴む。ピリツと全身に痛さが伝わり、これが夢ではないと思わせる。僕は時間を確認しようと、リビングに入った。だが、鉄の異臭が漂って目眩をした。

そうだ。リビングはそのまま放置したんだっけ。

僕は仕方なく鼻を押さえ、リビングの壁に掛けられている電信板の時計を見た。

驚いた。刻んでいる日付は二日進んでた。どうにも二日余計に眠

つてたらしい。

「はは、嘘でしょ……」

僕はたまらず、玄関に行き新聞受けを見た。乱雑に重ねられた新聞紙と広告を手取る。日付が新しいのは、やはり上の方だ。だが、それを見ても日付が電信板と同じく、二日過ぎていた。

それを見て、急に怖くなった。非日常なものを認めるのが怖くなってしまう。

僕は急いで寝室へと向かう。ドアを開けて、母さんを確認することにした。母さんが壊れていないなら、今を認めなくても別に良いのだ。

「母さん、大丈夫……」

では、無かった。ベッドから床に降りているのは良いものの、あの時と同じような独り言を呟いていた。聞き取れるのは、『秋人』という言葉だった。

でも、僕じゃないと思った。母さんは両腕で、見えない何かを持っていた。ゆらゆらと揺らしている何かを……。恐らく、想像したくはないが乳幼児の僕を揺らしているのだろう。

「ねえ……、私の可愛い秋人。ようやく私をママって読んでくれたのね。嬉しいわ」

「秋人、もう少しでパパも帰ってくるからね……。もう少しの辛抱よ……」

「ああ、私の秋人。秋人。私の秋人……」

目は虚ろなままだった。想像で幼いときの僕が見えているのだ。だが僕は無理にでも振り向いて貰うしかなかった。自分の自我を保つためにも。

僕は躊躇したが、母さんが抱いているであろう『僕』を引き離れた。いや、そもそも実体が無いのだから、引き離れたも何もないのだが。それでも、行動自体は成功した。母さんの顔がこちらを向いた。瞳は虚ろながらも、僕を睨んでいた。母さんが両腕を伸ばす。

「返して！ 私の秋人を返して！ 返しなさい！！」

「駄目だよ。母さん、僕が秋人だよ！　ねえ、目を覚まして……」
だが、そんなことは母さんに聞こえてなかった。

「返して……。うつつ。その子は私の大切な大切な子なの！　赤の他人が触らないで！」

「……ッッ！？」

僕は動揺して、うっかり手を離れた。母さんにはじめて、赤の他人と言われてどうしようもなく辛かった。

そして、異常なことを始めて認めるしかなく、余計怖くなった。

母さんはもう僕を秋人だと認識していないんだと。

僕は母さんを壊してしまったんだと。

僕は意外であっけない現実を認めてしまった。

だから、僕は居たたまれなくなつて家から飛び出した。

もう、家には僕の居場所なんて無いと思いながら。

外は止むこともなく雨が降っていた。湿度が上がるに始まり、少し肺を萎ませる。僕は走り続けて、でも止まることは出来なかった。走れる限り、走り続けるしかなかった。

前などいつさい見ず、ただ前方へと。

そのせいか、途中で石に躓いて転んだ。手は付けられなかった。

胸から僕は地面に叩きつけられるしか無かった。倒れて始めて、僕は泣いた。今までのことが頭に一斉に溢れ出して、苦しかった。

「……うう。うつつあああああつ！」

心臓が破裂しそうで、何もかも吐きたかった。それで、苦痛を消費したかった。

駄目だった。それでも駄目だった。あの光景はこれから僕を苛まし続けるのだ。

ポケットに入っていた携帯の着信音が聞こえた。瞬間的に、僕は今送られてきたメールを見てしまう。

「……うあ、これ…何…」

そこには、

『○○月××日。澤崎秋人様。貴方は家族の崩壊を演出し、実の母親を壊しました。それは国民の中では遺憾であり、憲法第××条に乗っ取り貴方を拘束します。拒否は許されません。貴方は今を持って犯罪者となるのです。これから貴方は沙央島に送還され、そこで更生期間を送ってもらいます。世間を騒がす犯罪者はそこで裁かれるのです。また、被害者の会団体代表は貴方を』

意味不明な文章だった。そして、何故か今までのことが書かれて
いる。

次は乱雑する断罪の咆哮だった。

『狂っている！　狂っている！　狂っている！　狂っている！　狂
 っている！　狂っている！　狂っている！　狂っている！　狂つて
 いる！　狂っている！　狂っている！　狂っている！　狂っている
 ！　狂っている！　狂っている！　狂っている！　狂っている！
 狂っている！　実の母親を壊すなんて狂っている！　お前の存在は
 社会に似つかわしくない。せいぜい狂ってからのたれ死ね、と申し
 ています。これで貴方は事情酌量の見込みをしばらく失いました』

羅列する言葉は理解を追い越していた。もう疲れていた僕は、思考をするなんて及びも付かなかった。ただ、単純に。これは僕に対する死刑宣告なんだと思った。

『では、最後に。貴方に『遺言のいとま』を差し上げましょう。これは偏に私たちが犯罪者に行うサービスであり、それ以外はありません。どうぞ、心ゆくまで一回の電話をお楽しみ下さい。尚、このメールは読み終わりが確認された後、消去されますので心にお刻み下さい。貴方はもうこの日常には戻れません。では、貴方にとって良い『いとま』でありますように……』

読み終わった後、勝手にそのメールは消失した。からくりは分らないが、悪趣味を通り越して逆に笑えた。メールは淡々と僕を非難するものだったけど、他は僕を案じてくれる内容だったからだ。心身共に傷を負っていた僕には程良いテイストだったのだ。

僕はそのメールの通り、一通の電話を掛ける。相手は、もちろん母さんではない。父さんでもない。唯一、友達でいてくれた江里と栄司にだった。時刻は正午。頃良いも程いい。恐らく、昼休みは二人で行動しているだろう。

そして、江里――、彼女は僕の呼び出しには出てくれる。いつも、好い加減ではなく真剣に。そこが僕が惚れている点だ。彼女は数回のコール音で出てくれた。

「……秋人。貴方、大丈夫なの？ もう、二日も来てないじゃない。何かあったかは質問しないけど、連絡はしなさい。心配するから」
「ごめんごめん。僕の方はそれどころじゃなくてさ。しばらく学校も来られそうに無いんだよ。遠い場所に行くから……」

「――遠い場所？ まさか、貴方沙央」

「その質問には答えられないんだ、ゴメンね。ただ、今まで起きた理由は話すよ。でも、内容が内容だから、聞いたらすぐに切ってね。いい？」

「それは、私に訊くこと？ 私は貴方を信用しているわ」

「ありがとう。それでも、僕を嫌いたくなる程の内容なんだよ？」

「ええ、それでも」

「――分かった。僕は、……僕は二日前不倫騒動のおりに母さんを壊したんだ。心をね」

僕は言葉少なで事実を口にした。下手な話は彼女の困惑を助長するものでしかない、と思ったからだ。僕は母さんを壊した。止める選択があつたのに僕はそうしなかった。僕は犯罪者なのだ。

「……秋人。貴方」

ほらね。彼女も例外なく僕を嫌う。それは普通であつて。僕は普通

では無くて。

しかし、彼女是否定はしなかった。

『私が、そんなことで嫌うと思う？ ううん。そんなことじゃ、失礼かもしれないけど。……一つ、質問していいかしら。貴方は私をどう見てるの？』

「どうって。頭が良くて歴史が好きで……」

『そうじゃないの。外見なことじゃなくて、中身のこと。存在と解釈してもいいわ』

「存在か。姉以上恋人未満。少々強欲で友人的な存在とか」

言いつく最中で、電話越しから負のオーラが発散したような感じがしたが、気にしないようにした。彼女は笑い声を響かせて、

『……そうなの。貴方、私のこと思ってるの。まあ良いわ。それで、貴方は友人と見ているのよね？』

「それがどうしたの」

『ええ。友人だから最初にも言ったでしょう。何があっても気にしない。それが条件なんだから。前書きが長くなっただけ、そういうわけよ』

「それじゃあ、僕の取り越し苦労なんだ。馬鹿みたいだ……」

僕は深いため息を吐いて、それでもさっきよりは平常を保てるようになった。

不思議だ。ほんの数分前までは、あれほど苦しかったのに。

僕は彼女のお陰で『いつも』を取り戻せていた。いや、彼女たちが。栄司も恐らく僕のことを聞いているのだろう。彼女たちの存在が僕を楽しみしてくれていた。

『……落ち着いたわね。じゃ、栄司に替わるから』

「や、替わらなくて良いよ。あいつは話をややこしくするだけだし」

『聞こえてるぞ、秋人！ 俺はな心配で鼻血が出たぞ。島流しは是非俺と一緒にな！』

「ごめん、支離滅裂だから。コメント、スルーしていい？ それに

鼻血って興奮しすぎだし。島流しは喜んで拒否するね」

『それでも、コメント返してくれる秋人は大好きだ！俺と結婚してくれ！グハッ』

あちらの方で唐突に打撃音が聞こえてきた。恐らく彼女がやっていそうだが、光景は想像したくない。彼女が早く栄司を叩きのめして携帯に出てくれることを祈る。

『ごめんなさい。ちょっと、変態が出没してね。それで、貴方は行くの？』

「……うん。行くしか僕は選択はないだろうから」

『そう。でも、私は行って欲しくないの。本当は栄司引きずらせて貴方を止めたいくらい』

「あはは、本当にやりそうで怖いよ。……でも、僕は行かないと駄目なんだ」

『ええ、知ってる。それが貴方の選択なのよね。だとしたら、私たちが秋人を止める権利はない。けれど、これだけは分かって……。貴方は一人じゃないから。私や栄司、沙央島に行けば千里がいるから。貴方は一人じゃないの。大丈夫』

彼女は度々に、貴方は一人じゃないと口にした。焦りや戸惑いではない励まし。高校から味わった友達という絆。僕は逆の意味で涙し、嬉しかった。

「……うん。ありがとう。ありが、とう。僕忘れないから。君たちのこと忘れないから」

『ほら、泣かないの。ここは感動シーンじゃないんだから。千里によろしくね。私たちは友達なんだったこと。また、会いましょう』

「うん。またね」

僕はそう言っただけで電話を切った。

「……ごめん、江里。僕は一つ嘘を言ったよね」
顔を上げて呟く。

これで友達に対する後悔は無くなった。それは即ち彼女たちを忘れることだ。全てを忘れるとは言わないが、断片的には彼女たちを

忘れることになる。

僕は彼女たちにこれ以上関わってほしく無かった。

そう。僕は犯罪者なのだから。“イラナイ”子供なのだから。

彼女たちまで巻き込みたくなかった。

だから、僕は彼女たちを安心させるために嘘を言った。

「うん。ごめん、江里。本当は会えもしないんだよ。一生沙央島に入ったら出てこれないから……」

確証はないが、出てこられた例は一度も聞いてない。また、孤島のため脱出は不可能だ。そもそも僕は子供だ。子供なんだ。全くもって、親に命令されるままの子供でしかない。それが無人島なんかに取り残されでもしたら生き残れる自信はない。数日足らずで死んでしまうだろう。従って、僕は沙央島から逃げ出す術は無いのだ。そして、沙央島に行ったとしても成瀬千里に会えるわけなんか無い。

日本中から“イラナイ”子供達が来るのだ。その中で知り合いと会えるなんて一握り。時間で言えば、一瞬でしかない。

「……そうだよ。何をぬか喜びしているんだ」

僕は自分を戒める。

「僕は結局、独りなんだ……。独りなんだよ」

変わらない、変えようとして最後には駄目になった言葉を繰り返す。

僕は独り。母さんを裏切って本当の意味で独りになった。

今はもう変えようがない事実。

僕はそれを自分に言い聞かせて生きていくしか無い……。

数分経って、ふと車の排気音が聞こえた。前を見ると、漆黒な雨の中、黒ベントと黒い服を着た女が佇んでいた。それは、僕を迎える棺桶と死に神のようにさえ見えた。死に神は僕を名指しして呼ぶ。

「澤崎秋人様。『遺言のいとま』は満足して頂けましたでしょうか？ さあ、私たちの沙央島。通称『機械仕掛け』へ参りましょう。どうぞ」

彼女は一方的に語って、僕を招いた。考える暇をさせず、丁重に僕を招き入れる。そして、僕は――

「うん。ありがとう」

了承して棺桶の胃袋に収まり、喰われた。死に神も喰われ、棺桶は雨の中運ばれていく。

そう、沙央島。通称『機械仕掛け』。

僕はそこで。

独りで生きていく。

第一話「全ては遠き日々」完

第一章第一話「全ては遠き日々」（後書き）

初めまして。櫻井樹翠と申します。基本はライトノベル系でジャンルはSF以外でしたらほぼ書けます。これからどうかよろしく願います。

この小説は、高校二年生の時に書いた小説をリメイクしたものです。当時は親やイジメに対する思いがあったので、こういう小説を描こうと書いていました。

ただ、この作品は未完成な所が多く、私としても納得できない部分がありましたので、再び執筆し直しました。ぜひ、読んでもらいたいです。

櫻井樹翠 拝

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0867b/>

心の軌跡

2010年12月21日16時23分発行